

纒ひもと黄泉よみより還かへ来り見れば、すなはち廻まわる。而しかうして後のちに、黄泉よみの状かたちを以もつちて大宰府だいさいふに解とす。府ふ其そのの事ことを信しんはず。彼かのの人便ひとに依よりて、船ふねに乘のりて京きやうに上のぼる。京きやうの中なかに還かへ来りて、伊太知卿いたちけいの閻羅王えんらわうの闕けつに捉とへられて苦くるを受うくる状かたちを陳のぶ。時ときに妻め子こ等ら聞ききて、懇こひ哀あひて言いはく「卒しにて七なな々なな日ひを経を、彼かのの恩おんの靈たまひの爲ために善よきを修とひ福ふくを贈くわること既すでに畢はる。何いかにか凶あふらむ、恵あはれ趣しゆに墮おちて劇はげしき苦くるを受うくることを」といふ。更さらに法花經ほふけきやう一部いふを写うつし奉たてまつりて、恭かしこ敬けいひ供養くやうし、追おひて彼かのの靈たまひの苦くるを救すくふ。此これまた奇異きいしき事ことなり。

災わざはひと善よきとの表相あらはれまづ現あられて後のちに其そのの災わざはひと善よきとの答こたへを被かる縁ことわり 第三十八

夫それ善よきと悪あしきとの表相あらはれ現あられむとする時ときに、彼かのの善よきと厲あしきとの表相あらはれはまづ兼かねて物ものの形かたちと作つくり、天下てんかの国くにを周行めぐりきて歌うたひて示しす。時ときに天下てんかの国くにの人ひと彼の歌うたの音おとを聞ききて咏よめを出だして伝たづなへ通とほふなり。

諸葉宮しよはのみやに二十五年にじふごねん天下てんか治しめたまひし勝宝しやうほう眞皇しんわう武太ぶたい上天皇あめのみこと、大納言だいなごん藤原朝臣ふじわらのあそみ仲麿なかつまを召よして、御前みまへに居ゐるて詔みことしてのたまはく「朕わがが子こ阿倍内親王あへひのちみと

道祖親王みちすけのちみと、二人ふたりを以もつちて天下てんかを治しめしめむと欲ほふ。是こゝの語ことばを云何いかににせむ。宜よろしく受うくやいなや」とのたまふ。仲丸なかつま答こたへて白はくさく「はなはだ勝かちれて能よし。御語みことばを受け白はくす」とまうす。時ときに天皇てんかう、祈いのの御酒みさけを飲のみましめ誓ちかはしめて詔みことしてのたまはく「もし朕わがが遺のちさむ勅しつを失うしなはば、天地相憶あめつちをみて大なる厲あしきを被からむ。汝なんぢ今いま誓ちかふべし」とのたまふ。時ときに仲丸なかつま誓ちかひて白はくさく「もし我われれ後の世のちのよに勅詔しつみことに違たがはば、天神地祇あまのつみ憶おもひ嗔おこりて大なる災わざはひを被かり、身みを破やぶり命いのちを滅ほろさむ」とまうす。是こゝの如ごとく誓ちかはしめ酒さけを飲のみましめて、祈いの禱たう已やに訖しる。然しかうして後のちに、天皇てんかう崩くずれひて後のちに彼かのの遺のちしたまふ勅語しつごの如ごとく、道祖親王みちすけのちみを以もつちて儲君もろぎみとしたてまつる。其そのの天皇てんかうの太后たうてい同じき諸葉宮しよはのみやに坐ます時ときに、天下てんかの国くにを挙こりて歌うたひて言いはく「年とし少すくくして失うしなせたる王わう、宝たからのごとき失うしなせたる王わうや、破やぶれたる玉たま、排はれたる綾あやはよ。しが命いのち幾いかに何いかにに墮おはむ。哀かなべたりや、魼うなぎ等らはよ。しが命いのち幾いかに何いかにに墮おはむ」といふ。是こゝの如ごとく歌うたひ。然しかうして彼かのの帝姫阿倍天皇あへひのちみと並ならび太后たうていの御世みよの天平勝宝ていへいしやうほう九年八月十八日くわんぱうしゅうねんはつがつじゅうはちにち、改あらためて天平宝字元年ていへいほうしじうねんとし、即すなはち年としに儲君もろぎみ道祖親王みちすけのちみ大宮だみやの殿とのより出いでて、獄ごくに投居なげゑられて殺死ころされ、並ならび黄文王わうぶんわう塩焼王しんやうわうまた氏々ししの人等ひとら俱みなに殺死ころさる。また宝字八年十月ほうしじはちねんじゅうがつに、大炊天皇おほひのちみ皇后くわうていに賊あはれ、天皇てんかうの位ゐを擡あはれ、淡路国たんろくこくに退しりぞきたまふ。逼おひ、並ならび仲丸なかつま

は、神龜元年しんき元年（西暦二月四日即位、天平感宝元年ていへいかんぼう元年（西暦七月二日讓位。一上卷七續。仲麿は、天平勝宝元年ていへいしやうほう元年（西暦七月孝謙天皇即位とともに大納言に任ぜられている。「勝宝」は眞皇武太上天皇しんわうぶたいあめのみこと大納言藤原朝臣仲麿ふじわらのあそみなかつまという呼称は孝謙天皇の時代のもの。二孝謙天皇。母は光明皇后。聖武天皇の発語中にみえる呼称なので、すでに天皇として即位していたかどうかの判断が困難である。下文に孝謙天皇の即位に関する記述を欠くのは、すでに即位していたことを示すか。二天武天皇の孫、新田部親王の子。三原文二人以之、令治天下、欲、云、何是語、宜受不也。阿倍内親王を天皇とし道祖親王を皇太子とする。三誓約。そのことが実現したならばこのような事態になるであらう、そのことが実現しなかつたならばこのような事態になるであらう、ということを書葉として表現して誓う。四底本訓歌所載（有介比）。五「是日、太上天皇崩於渡殿、遺詔、以中務卿從四位上道祖王、為皇太子」（統紀・天平勝宝八年五月二日条）。天平勝宝八年は七十六年。天皇太子。六光明皇后。六「也、一彼与、志我幾何、贈命」という形式の句二句から成る。「也、一彼与」は、「天（あめ）なるや弟（あに）野女（のめ）の頭（かぶ）をせる玉の御統（みと）のあな玉（たま）はや（書紀・神代下）にみえる「一や」はやの形式と関係があらう。「一はや」は愛惜の心情をあらわす。「一はよ」も同意であらう。若くして逝きたる王、財宝のごとき貴き王、逝きたる王よ、あ、欠けたる王よ、破れたる綾よ。早逝した王を財宝にたとえる。一その命はどれほどの師格で買えるのだろうか。どのような高貴な代償を払っても、もう買ははしない。原文志我幾何「贈命」。増一阿含経十八に、波斯匿王の母の死に関して、たとえ五百の妓女、五百の珍宝、五百の衣裳を閻羅王に与えても死を避けることはできない、とみえる。二衰弱してしまつた魼等。三魼は比目魚のことであらう。云文類聚・九十九・群書類下魚に鰓心図曰、比目魚者、王者明德則見とみえ、晋の郭璞の比目魚贊を引用することからもわかるように、祥瑞である。祥瑞であるはずの比目魚の衰弱をなげく。天皇の徳の衰微を危惧する。二原文「彼帝姫阿倍天皇並太后御世」。太后（光明皇太后）の存在を重視した表現。三七十七年。三橘奈良原麻呂の變。統紀・天平宝字元年条に詳細な記事がある。三月二十九日に皇太子を廃せられ弟（即ち）に降される。七月二日、兵によつて右京の宅が囲まれる。四日、「麻呂比（めいり）」と改名され、拷問されて杖下に死す（統紀）。五不明。六長屋王の子。七月四日、「多末（たまた）」と改名され、拷問されて杖下に死す（統紀）。七道祖親王の兄。天平宝字元年（宝字）七月二十七日の勅によつて遠流を免されてゐる（統紀）。殺されてはいない。のち天平宝字八年（宝字）九月、仲麿に擁立されて公帝を称し、敗死（統紀）。三七七十四年。十月九日。六本説話では孝謙天皇をさす。一親王の位を賜ひ、淡路公に封ぜられた（統紀）。二底本破損。三仲麿の死は九月十八日（統紀）。四底本破損。五鷹を飼むための道具のひとつ。

一 道祖王、尊文王、塩焼王、大炊王たちをさす。二 王の語が歌に含まれていることをいう。三 法師を、女の服装である褌を身に着けてからといって侮つてはならない。僧は衫を着て褌をつけて、その上に袈裟をかけた（僧衣具履）。「法師等」は僧の自称であらう。僧が女を誘ふ歌。四 底本破損。五 鷹を飼むための道具のひとつ。

一 道祖王、尊文王、塩焼王、大炊王たちをさす。二 王の語が歌に含まれていることをいう。三 法師を、女の服装である褌を身に着けてからといって侮つてはならない。僧は衫を着て褌をつけて、その上に袈裟をかけた（僧衣具履）。「法師等」は僧の自称であらう。僧が女を誘ふ歌。四 底本破損。五 鷹を飼むための道具のひとつ。

等また氏々の人俱に殺死さる。彼の先に天下を挙りて歌詠へるは、此れ親皇の滅びたまふ表相なり。

また同じき大后の坐す時に、天下の国を挙りて歌詠ひて言はく「法師等を、裙著<sup>四</sup>悔りそ。之の中に要帝に薦<sup>五</sup>槌懸れるぞ。いよいよ発つ時々に狼しき卿や」といふ。また詠ひて言はく「我が黒みそひ、またに宿給へ。人と成るまで」といふ。是くの如く歌詠ふ。帝姫阿倍天皇の御世の天平神護元年歳の乙巳に次る年に、始めて弓削氏の僧道鏡法師、皇后と枕を同じくして交通く。天下の政を相摂りて天下を治む。彼の歌詠へるは、是れ道鏡法師の皇后と枕を同じくして交通き天下の政を摂る表と答となり。

また同じき大后の時に詠ひて言はく「正に相はむ木の本には、大徳食し肥れて立ち来る」といふ。是くの如く詠ひて言ふ。是れ当に知るべし、同じき時に道鏡法師を以ちて法皇とし、鴨氏の僧曇興法師を以ちて法臣とし、基真法師を以ちて法參議として、天下の政を摂る表と答となり、と。

また諸樂宮に二十五年天下治めたまひし勝彦天皇太上天皇の代に、天下を挙りて歌詠ひて言はく「朝日刺す、豊浦寺の西に有るや、押してや、桜井に、押してや、押してや、桜井に、白玉しづくや、古き玉しづくや。押してや、押してや、然しては、国そ来えむ。我が家を来えむや。押してや」といふ。是くの如く詠ふ。後に帝姫阿倍天皇の代の神護景雲四年歳の庚戌に次る年の八月の四日に、白壁天皇位に即きたまふ。同じき年の冬十月の一日に、筑紫国を進り、改めて平賀元年として天下を治めたまふ。是を以ちて当に知るべし、先に歌詠へるは、是れ白壁天皇の天下を治めたまふ表相と答となり、と。

また諸樂宮に国食し帝姫阿倍天皇の代に、国を挙りて歌詠ひて言はく「大宮に直に向へる山部の坂、痛くな踐みそ、土には有りとも」といふ。是くの如く詠ひて後に、白壁天皇の代の天応元年歳の辛酉に次るとしの四月の十五日に、山部天皇位に即き天下を治めたまふ。是を以ちて当に知るべし、先に歌詠へるは、是れ山部天皇の天下を治めたまふ先の表相と答となり、と。

山部天皇の代の延暦三年歳の甲子に次るとしの冬十一月の八日乙巳日の夜戌時より寅時に至るまで、天皇ことごとく動く。續<sup>三</sup>ひて飛<sup>三</sup>ひ遷る。同じき月の十一日の戊申に、天皇并に早良皇太子、諸樂宮より長岡宮に移坐す。天皇の飛び遷るは、是れ天皇の宮を移りたまふ表なり。

次の年乙丑年の秋九月の十五日の夜、竟夜月の面黒くして、光消え失せ、空闇し。同じき月の二十三日の亥時に、式部卿正三位藤原朝臣種継、長岡宮

してや、然しては、国そ来えむ。我が家を来えむや。押してや」といふ。是くの如く詠ふ。後に帝姫阿倍天皇の代の神護景雲四年歳の庚戌に次る年の八月の四日に、白壁天皇位に即きたまふ。同じき年の冬十月の一日に、筑紫国を進り、改めて平賀元年として天下を治めたまふ。是を以ちて当に知るべし、先に歌詠へるは、是れ白壁天皇の天下を治めたまふ表相と答となり、と。

また諸樂宮に国食し帝姫阿倍天皇の代に、国を挙りて歌詠ひて言はく「大宮に直に向へる山部の坂、痛くな踐みそ、土には有りとも」といふ。是くの如く詠ひて後に、白壁天皇の代の天応元年歳の辛酉に次るとしの四月の十五日に、山部天皇位に即き天下を治めたまふ。是を以ちて当に知るべし、先に歌詠へるは、是れ山部天皇の天下を治めたまふ先の表相と答となり、と。

山部天皇の代の延暦三年歳の甲子に次るとしの冬十一月の八日乙巳日の夜戌時より寅時に至るまで、天皇ことごとく動く。續<sup>三</sup>ひて飛<sup>三</sup>ひ遷る。同じき月の十一日の戊申に、天皇并に早良皇太子、諸樂宮より長岡宮に移坐す。天皇の飛び遷るは、是れ天皇の宮を移りたまふ表なり。

次の年乙丑年の秋九月の十五日の夜、竟夜月の面黒くして、光消え失せ、空闇し。同じき月の二十三日の亥時に、式部卿正三位藤原朝臣種継、長岡宮

「麗ヲ編ニハ麗随ト云物ニ糸ヲ巻テ、アトサキへ取テガヘテ編ナリ」(万葉代記・五)。男性性器をいう。六その時には、ヤ自分に対して敬語を用いている。戯笑歌。ヘ私の「黒」のそばで、私の股に寝なさい。「黒」は女性性器をいうか。「そひ」は、かたわら。ヤ豊俗するまで。女が胸を露う歌。二七六五年。二天平宝字五年(六二)より龍幸されたと、統紀・宝龜三年四月六日条にみえる。本説話に天平神護元年に「姫とするのは何に拠つたものか不明。天平神護元年八月の詔を最初としてそれ以後の詔には「朕師」の呼称が登場し、閏十月二日に道鏡は太政大臣兼師の位を授けられている。「王と愛欲」のイメージは上巻一縁に含まれていた。三「法師」の語が歌に含まれていることをいう。三女に直接に逢おうと、約束の場所の木の下の待つていたら、女は来なくて、太った僧がやってくる。二統紀・天平神護二年十月二十日の詔に、太政大臣兼師の道鏡に法王の位を、円興兼師に法臣の位を、基真兼師に法參議大律師として正四位上を、授けた、とみえる。底本の原文では基真に関する記事が欠け、単なる誤脱とみて文を補ひ訂した。二「大徳」の語が歌に含まれていることをいう。二豊浦寺の西にある桜井に、桜井に真珠が沈んでいる。美しい真珠が沈んでいる。そうならば、国が来える。我が家が来える。「朝日刺」は豊浦寺にかかる枕詞であろうが、かき方方は不明。「こゆら」のゆらに光り輝く意は無いのであろうか。「押天郎」は、はやしことば。統日本紀・光仁天皇即位前紀に、「童謡曰」として「菟城寺乃前在也、豊浦寺乃西在也、於志止度、刀志止度、桜井白壁之宮也、好壁之宮也、於志止度、刀志止度、然為波、国豊昌也、吾家豊昌也、於志止度、刀志止度」(「蓋天皇登極之徴也」とみえ、備馬業景城に市川良乃、天皇乃米戸名留也、止乎良乃天皇乃、爾之祭留也、江乃波為爾、之皇乃方之川久也、末之良太乃之川久也、於之止々、於之止々、之加之天波、久爾曾左加江无也、和伊戸良留、止世无天也、於之止々、止之電止、於之電止、止之電止」とみえる。「豊浦寺は上巻一縁にみえた。二七七〇年。六光仁天皇。白壁王。元改元は十月一日だが、亀の献上は、八月五日に肥後国豊北郡の日養部(ひのや)に、弘主亮が白亀を、八月十七日に肥後国益城郡の山部王が白亀を、献上(統紀・宝龜元年十月一日条)。二白壁天皇の白が歌に含まれていることをいう。三皇居にまつづくに向つては山部の坂は、頻繁に踏み歩いてはならない。雪が降りつもっているのではなく土だからといって。大宮の内に外(そ)にもめづらしく降れる大雪な踏みそね惜(し)し(万葉集・十九・三三三)。「大徳」の語(豊浦寺)の雪も踏みそね(万葉集・十九・三三三)。「諸樂宮」とあり、「大宮」は平城宮。この歌のところに興趣があるのか抑然としな。日本後紀・大同元年四月条に、「初有童謡曰」として「於保美館(多太)に武甕槌流、野宮能佐賀、伊太久那布美蘇、都知仁波阿利登宅(天皇登極之徴也」とみえる。上巻一縁には「向於大宮」という表現が含まれていた。三七八一年。三桓武天皇。山部親王。四山部天皇の「山部」が歌に含まれていることをいう。三七八四年。三統日本紀はこの日の条に記事は無い。下文を流星群の記事とする現代的理解の当否は不明。三午後七時から九時のところ。三午前二時から五時のところ。元星の名。北辰を神格化した天皇大帝ではなく、心宿の天王(とそり座(しそ))か。季節的に



の嶋町にして、近衛の舎人雄鹿宿禰木積と波々岐將丸とに射られて死ぬ。彼の月の光失せたるは、是れ種継卿の死にぬる表相なり。

同じき天皇の御世の延暦六年丁卯の秋九月の朔四日甲寅日の酉時に、僧景戒慙懣する心を発し、憂愁へ嗟きて言はく「嗚呼、恥しきかな、忤しきかな。世に生れて命を助け、身を存つに便無し。等流果に引かれて愛網を結ぶ。業煩惱に纏はれて生死を継ぐ。八方に馳せて生ける身を炬す。俗家に居て妻子を養ふ。養ふ物無く喰ふ物無し。菜無く塩無く衣無く薪無し。毎に万の物無くして思ひ愁ふ。我が心安くあらず。昼はまた飢え寒え、夜はまた飢え寒ゆ。我れ先の世に布施の行を修はすありき。鄙なるかな、我が心。微しきかな、我が行」といふ。然うして寝。子時に夢に見らく「食を乞ふ者景戒の家に來り、経を誦み教化へて云はく「上品の善き功德を修はば、一丈七尺の長き身を得。下品の善き功德を修はば、一丈の長き身を得」といふ。爰に景戒聞きて、頭を廻して乞ふ人を睨れば、紀伊国名草郡の郡内の楠見栗村に有る沙弥鏡日なり。徐に就きて其の沙弥の前を見れば、長一丈ばかり広一丈ばかりの板の札有り。彼の札には、一丈七尺と一丈とを印すなり。景戒見て問ひてはく「斯れは是れ上品と下品との善き功德を修ふ人の身を印すや」といへば、答へてはく

「唯然り」といふ。爰に景戒、慙懣する心を発し、彈指して言はく「上品と下品との善を修はば、身の長を得ること是くの如く有るなり。我れ先にただし下品の善き功德すら修はずありき。故に我れ身を受くることただし五尺余のみ有り。鄙なるかな」といひ、彈指して悔ち愁ふ。側に有る人、聞きてみな言はく「嗚呼、当なるかな」といふ。すなはち景戒、炊かむとする白米、半升ばかりを擗げて、彼の乞ふ者に施す。彼の乞ふ者、呪願して受け、立に書巻を出し、景戒に授けて言はく「此の書を写し取れ。人を度すに勝れたる書なり」といふ。景戒見れば、言の如く能き書語教要集なり。爰に景戒、何すれぞ紙無きと愁ふ。乞ふ者沙弥、また本垢を出し、景戒に授けて言はく「斯に写せ。我れ他処に往き、食を乞ひて還來らむ」といふ。然うして板の札并に書を置きて去る。爰に景戒言はく「斯の沙弥は、常には食を乞ふ人にあらず。何故ぞ食を乞ふ」といふ。有る人答へて言はく「子数多有りて養ふ物無し。食を乞ひて養ふなり」といふ」とみる。夢の答にまだ詳ならず。ただし聖の示せるかと疑ふ。「沙弥」とは、観音の變化なり。何を以ての故に。いまだ具戒を受けざるを、名けて「沙弥」とす。観音もまた爾り。正意を成るといへども、有情を饒益せむとして故に因位に居るなり。「食を乞ふ」とは、普門示現の三十三身なり。「上

は不測。諸注は、「天皇」の本文とする。「飛動、續紛而飛遷」という表現に複数個の星の移動を讀みとつてのことであろうか、下文にも「天皇」とあり、「星」の語につねに「天」の字が冠せられるのは不自然といえよう。三「天皇」移幸長岡宮（統紀）。三「上文」の「表」表相とされた歌には、かならず、その結果としてひきおこされる事件の中心人物を示すことが含まれていた。「天皇」という名の星が動いたことが天皇の移動（遷都）の表であつた、とするのも、表が歌であるのと自然現象であるとの相違はあるが、同じ考へに拠っている。三七八五年。統日本紀はこの日の条に記事は無い。月食。三「中納言正三位東式部卿藤原朝臣種継被射薨」（統紀）。統紀には時刻は書かれていない。三「爰時」は午後九時から十一時のころ。三「藤原清成の子。宇合の孫。七八五年に歿。四十九歳。長岡京への遷都のために尽力した。三「長岡京跡は京都府向日市。天皇は平城京に行幸中であつた（日本紀略）。

一日本紀略。延暦四年九月二十四日条には中衛壯麗木積。二日本紀略には「近衛宿禰」直接に手を下した二人の名をあげて自謀者の大伴継人（統紀。紀略にみえる）の名を記さないのは景戒が大伴氏出身であるため、とする若田靜一の説がある。三上文では、「表」表相の中にかならず、その結果としてひきおこされる事件の中心人物を示すことが含まれていた。種継のばあい、（継（つぐ、つき）を想起させるものとして「月（つぐ、つき）」がとらえられているのであろう。下巻二十八縁は、冒頭に「天で書きおろされて形式が他説話と大きく異なり、また内容的にも他説話とべだたつている。きわめ

て独立性の強いものである。冒頭に種継事件までは、おそらくは、すでに立書になっていたものに拠つたのであろう。四景戒の夢記と自注。おそらくは、延暦六年厚徳興本説話集では末尾の説話（現存本では下巻三十三縁）の次に位置したであろう。五七八七年。六午後五時から七時のころ。七恥ずかしい。八報果。業因によつてみちがかれた果。九執着の解。一〇業因となる煩惱。一一迷いの世界を輪廻すること。一二事子の有無と私度か否かということとは無関係。一三上巻十九縁「百段。福井康順は、後代の天皇の出家や武士の人道の例などをあげて、日本仏教では出家即無妻ではなかったとするが、本説話のころにも同様であろう。一四少年出家（懷風藻）とされる弁正に二人の子朝慶、朝元がいるのは、おそらくは出家後の妻帯。弁正は私度とはされていず、また卓識視されてもいない。一五「若人得財、食糧不施、当知。即皇未來世中貧窮種子」（懷風藻。卷・五）。一六午後十一時から午前一時のころ。一七「品」は等級の意。一八仏の身長一丈六尺を超える。夢の中でのことなので、何か根拠となる説が存するわけでもないであろう。一九和歌山市栗あたり。二〇未詳。本説話以外に所伝をみない。二一異様なイメージである。当時の「板」は、オノヤノミヤクサビで木を裂き斬り、チヨウナヤヤリガソナで削つて作つていた（村松良次郎）。本説話にみえる巨大な板の存在は、当時には考えにくく。二二「五尺者、仏法伝義庭時良也（東山往來）。二「唐の道世の諸羅要集」と同一の書か否か不明。道世の書は二十巻。下巻二縁には、一卷に調卷された細字の法華経が、遊行する僧の持ち物としてみえる。法華経が可能であるならば、道世の諸羅要集も細字で書写し一卷に調

品の「一丈七尺」とは、淨土万徳の因果なり。「一丈」は、果の教とす。田満するが故に。「七尺」は、因の教とす。満たざるが故に。「下品の一丈」とは、人天有漏の苦果なり。「慙愧づる心を発し彈指して恥ぢ愁ふ」とは、本有種子、福智を加行するなり。遠く前の罪を滅し、長に後の善を得るなり。「慙愧づ」は、鬚髮を剃り袈裟を披著るなり。「彈指す」は、罪を滅し福を得るなり。「我れ身を受くることただし五尺余のみ有り」とは、「五尺」は、五趣の因果なり。「余」は、不定性の、心を廻して大に向くなり。何を以ちての故に。尺にあらず丈にあらず、数定らぬが故なり。また五道の因と爲るなり。「白米を擧げて乞ふ者に獻る」とは、大白牛車を得むが爲に、昔願を発して仏を造り、大乘を写改めて、慙に善き因を修ふなり。「乞ふ者呪願して受く」とは、觀音願ふ所に應ふるなり。「書を授く」とは、新舊種子、人空の智を加行するなり。「本垢を授く」とは、過去に時に本有の善き種子、煩惱に覆はれて久しく形を現さざれども、善き法を修ふに由りて後に得べきが故なり。「我れ他処に往き食を乞ひて還来らむ」とは、「他処に往き食を乞ふ」は、觀音の無縁の大悲、法界に馳せて、有情を救ふなり。「還来らむ」は、景戒願ふ所を畢らば、福德と智慧とを得しめむとなり。「常には食を乞ふ人にあらず」とは、景戒願を発

さぬ時は、感ふる所無きなり。「何故ぞ食を乞ふ」とは、今願ふ所に應へて、やうやく始めて福來るなり。「子多数有り」とは、化ふる所の衆生なり。「養ふ物無し」とは、無種性の衆生は、仏に成らしむるに因無きなり。「食を乞ひて養ふ」とは、人天の種子を得るなり。

また僧景戒夢に見る事。延暦七年戊辰の春三月の十七日乙丑の夜に、夢に見らく「景戒の身死にたる時に、薪を積みて死にたる身を焼く。爰に景戒の魂神、身を焼く邊に立ちて見れば、意の如くに焼けず。すなはち自づから柎を取り、焼かるる己が身を築き申き挽して、返し焼く。先に焼ける他人を教へて言はく「我が如くに能く焼け」といふ。景戒焼かるる己が身を見れば、脚と膝との筋骨と臂と頭と、みな焼かれて断れ落つ。爰に景戒の神識、声を出して叫ぶ。側に有る人の耳に、口を当てて叫び、教へて遺言を語る。彼の語言の音、空しくして聞かれざれば、彼の人答へず。爰に景戒、惟ひ付るらく「死にたる人の神は音無し。故に我が叫ぶ語の音、聞えざるなり」とおもふ」とみる。夢の答にまだ来らず。ただし惟へば、もしは長き命を得むか、もしは高き官位を得むかとおもふ。今より已後、夢に見る答を待ちて、知るのみ。然らして延暦十四年乙亥の冬十二月の三十日に、景戒伝燈住位を得たり。

差することは可能であらう。また、かならずしも全文を収録したものではなく抄出本であつてもよい。遊行するを食沙弥の持ち物としてそのようなものを規定すべきか。しかし、道世の諸經要集報恩部背恩縁に「諸經要集」という名の書が引用されているのは、他にも同名の書が存在したことを示しており、本説話の諸教要集が「諸經要集」の誤りであつたとしても、それを道世の書と限定することができない。三三使用すみの紙。ほご。ほご。区故齊春秋云、沈麟士字雲積、少清貧無紙、以三翻故書字数千卷(和名抄)。本説話での用字はホンクといふ音を示すためのもの。三三以下に景戒自身による夢とかが展開される。夢の解釈というよりもむしろ夢を文章化した作品に対しての注釈、夢記に対する目注、といった趣がある。景戒による夢ときは、夢を聖示(仏菩薩の啓示)ととらえてのもの。夢を未来のできごとを示す「しるし」、前兆、ととらえる中巻二十縁、下巻三十六縁とは大きく異なる。二夢に登場した「沙弥」は、觀音が姿をかえたものである、なぜ他の姿ではなく「沙弥」の姿に姿してあらわれたのか、それは「沙弥」こそが觀音にもっとも近いありかたであるからなのだが、と景戒は説く。景戒の関心は「沙弥」というありかたにあり、「沙弥鏡日」という人物には無い。三夢に登場した沙弥が「乞食」をするのは、觀音が衆生落度をおこなうことを表現したものだ、と景戒は説く。云々觀音が衆生落度のためにあらわした三十三種の姿。示正化身者、如法華經普門示現之類也(淨土論註)。三三景戒の解釈によれば、夢で沙弥が示した二種類の身長は、觀音が景戒に示した二種類の生きかたである。ひとつは、成仏の一階階たる淨土に生まれること、もうひとつは、人間界や天上界という迷いの世界に生まれること。因縁に己と果縁に二丈とを含む上品の身長は、淨土に生まれるための業因と報果とを示し、果縁に二丈の上品の身長は、迷いの世界に生まれているという報果を示す、と景戒は説く。

とつは、人間界や天上界という迷いの世界に生まれること。因縁に己と果縁に二丈とを含む上品の身長は、淨土に生まれるための業因と報果とを示し、果縁に二丈の上品の身長は、迷いの世界に生まれているという報果を示す、と景戒は説く。

一夢に登場した景戒自身の行動を、出家して滅罪の道をあゆむ彼自身の生きかたをあらわしたものである、と景戒は説く。二「本有種子」は下文の「新舊種子」に対する語。先天的に存在する種子。種子がすべての現象の因となる。「加行は現代ではキョウといういい方がふつうだが、行する意。福智は福德と智慧。本来蔵せられていた可能性が行によつて福德智慧の方へ向へとむかう。景戒は前業を暫擧して福德智慧を獲得する道を歩みつつある。三夢に登場した景戒自身の身長「五尺余」の意味するところがあきらかにされる。五趣への道(五趣因果)と成仏への道(不定性)との岐路に景戒は立つている、と景戒は説く。四地獄、餓鬼、畜生、人、天。迷いの世界。下文の「五道」に同じ。五このあたり、放証の指極にあるように、菩提心論若不定性者、無邊劫限、遇緣便廻心向大に拠っている。不定性は不定性。下文にみえる「無種性」とともに五性のひとつ。心をひろがえして大乘におもむくことと成仏する可能性をもつ。六夢に白米を乞ふ者に獻じたことの意味は、不定性の人の廻心向大のおこないをあらわすものである、と景戒は説く。景戒自身がいまこの不定性の立場にたっている。七白牛に牽かせた大車。大乘の教えにたとえる。妙法蓮華經・譬喻品にみえる譬喩に由来する。八妙法蓮華經の異稱としての用法であらう。



同じき天皇の平城宮に天下治めたまひし延暦十六年丁丑の夏四五  
両月の頃、景戒の室に夜々ごとに狐鳴き、并に景戒の私に造れる堂の壁を狐堀  
りて内に入る。仏の坐の上に尿矢りて穢す。或るは屋戸に向ひて鳴く。然ら  
して二百二十余箇日を経て、十二月の十七日に景戒の男死ぬ。

また十八年己卯の十二箇月の頃、景戒の家に狐鳴く。また時々枕嚙  
鳴くなり。次に来る十九年庚辰の正月の十二日に、景戒の馬死ぬ。また同  
じき月の二十五日に、馬死ぬ。

是を以ちて当に知るべし、災の相まづ兼ねて表れ、後に其の災の災来り破る  
なり、と。然らして景戒、いまだ軒轅黃帝の陰陽の術を推ねず、いまだ天台智  
者の甚深の解を得ず。故に災を免る由を知らずして、其の災を受く。災を除  
く術を推ねずして、減ぶる愁を蒙る。動めざるべからず、恐りざるべからず。

### 智と行と並び具はる禪師重ねて人の身を得国皇の子に 生るる縁 第三十九

釈善珠禪師は、俗姓は跡連なり。母の姓を負ひて跡氏と為る。幼き時に母

に随ひて大和国山辺郡磯城嶋村に住む。得度し精勤めて修ひ学ひて、智と  
行と双ながら有り。皇臣に敬はれ、道俗に貴はる。法を弘め人を導き、以ちて  
行業とす。是を以ちて天皇、其の行の徳を貴び、拜ひて僧正に任く。而りして  
彼の禪師の願の右の方に大なる魔有り。平城宮に天下治めたまひし山部天皇の  
御世の延暦十七年の比頃に、禪師善珠命終る時に臨みて、世俗の法に依りて  
飯占を問へる時に、神靈ト者に託きて言はく「我れかならず日本国王の夫人丹  
治比媛女の胎に宿りて、王子に生れむ。吾が面に魔著きて生れむ。以ちて虚  
実を知るのみ」といふ。命終りて後に、延暦十八年の比頃に、丹治比夫人一の  
王子を誕生みたまふ。其の願の右の方に魔著けること先の如し。善珠禪師の面  
の魔失せずして著きて生れたまふ。故に名けて大徳親王と号す。然うして三  
年ばかりを経て世に存りて薨りたまふ。飯占を問へる時に、大徳親王の靈、  
ト者に託きて言はく「我れは是れ善珠法師なり。暫間国王の子に生る。吾が為  
に香を焼き供養せよ」とのたまふ。是の故に当に知るべし、善珠大徳、重ねて  
人の身を得て人王の子に生れたまふ、と。内教に言はく「人家々」とは、其れ  
斯れを謂ふなり。是れまた奇異しき事なり。

また伊与国神野郡の郡内に山有り、名けて石鏡山と号ふ。是れすなはち彼の

九「新羅種子」は上文の「本有種子」に対する語。  
後天的な種子。景戒がそれまで知らなかった書  
物を手渡された、というイメージが「新羅種子」  
のイメージを喚起している。「人空は法苑」に  
対する語で、人は空である、五陰は無我である  
と知ること。『道行人空語』は、行して人は空で  
あると知る智に到達する。景戒は新たな行業に  
よって菩提を得る道を、歩みつつある。二〇仏  
菩薩の慈悲。二一景戒のところに。二二五性の  
ひとつ。成仏の可能性を欠く。二三人間界や天  
上界に生まれる因。二四後代の説話集(たとえ  
ば宇治拾遺物語)にみえるように、「一事は説  
話の標題と考えるべきであらう。二五七八八年。  
二六きわめて異様な、強烈なイメージを含む夢  
である。二七死に際して魂が肉体から分離する、  
という考えにもとづく。身体ではなく魂が主体  
としてとらえられている。二八「如焼死屍、  
以杖廻転、屍既已已、杖亦已焼(真金論記、  
二十八)」という例もみえるが、実体験にもとづ  
いた叙述であらう。二九敦煌文書中の夢解書に  
は「身死の夢を長命と解く例がみえる」とい  
う中前正志の指摘がある。三〇七五五年。  
三一僧位のひとつ。二伝燈大師位(准三位)、伝  
燈法師位、伝燈滿位、伝燈住位(准五位)、伝  
燈入位(准七位)(二十卷本和名抄)。

一以下には景戒自身にかかわる系祖説話が展開  
される。本書では桓武天皇(山部天皇)に関して  
の宮号表示に不審な点が多い。そこに並記され  
た年時を基準として桓武天皇の宮号表示をみる  
ならば、正しいものは例も無い。平城宮とあ  
るべきを長岡宮とする例(下巻三十縁)。長岡宮  
とあるべきを平安宮とする例(下巻三十九縁)、  
平安宮とあるべきを平城宮とする例(下巻三十

八縁、三十九縁)などがみえる。本書の宮号表  
示によれば、長岡宮から平安京へ、平安京から  
平城京へと遷都したかのような印象を受けれる。  
また、年の下支に誤りのみえる下巻三十縁、三  
十一縁、三十二縁も、桓武天皇の代の説話であ  
る。このような誤りが何に起因するものか不明。  
二七九七年。二七九九年。二八〇〇年。二八〇一年。  
種か。二八〇〇年。二八〇一年。二八〇二年。  
名(史記・五帝本紀)。二下巻序。

第三十九縁 転生説話。いささか異様な印象  
を与えてはいるが、景戒の意図としては当代  
の天皇を仏教史の中に位置づけ、重なる  
天皇であることを願望しつつ勸導。  
二下巻三十五縁。二阿刀連「迹連」とも表  
記する。扶桑略記・延暦十六年四月二十一日条  
には「俗姓安部朝臣、京兆人也」とみえる。  
二奈良県桜井市あたり。二七六寺年表によ  
れば、天武二年(天武)二月に傳正。日本後紀に  
よれば延暦十六年(延暦)二月に傳正。いずれの  
説に拠つても天皇は桓武天皇。二延暦十六年。  
二下巻三十八縁。二七九八年。七六寺年表で  
は、延暦十六年四月二十一日歿とされる。延暦  
十六年歿のほうに延暦十七年の大徳親王誕生に  
合致するのだが、本説話では大徳親王誕生を一  
年くり下げて延暦十八年としており、延暦十七  
年善珠歿のほうがかえって叙述に矛盾を生じな  
い。本書の桓武天皇の代の説話に年時の不審な  
記述を含むことが多いのだが、こゝもその例。  
二原文「臨命終時」。二仏典語。二三米詳。名  
称からは、飯を用いた古いであると推測される  
のだが、下文にはそれを思わせるようなものが  
みえない。本説話にみえる二例の飯占は、いず